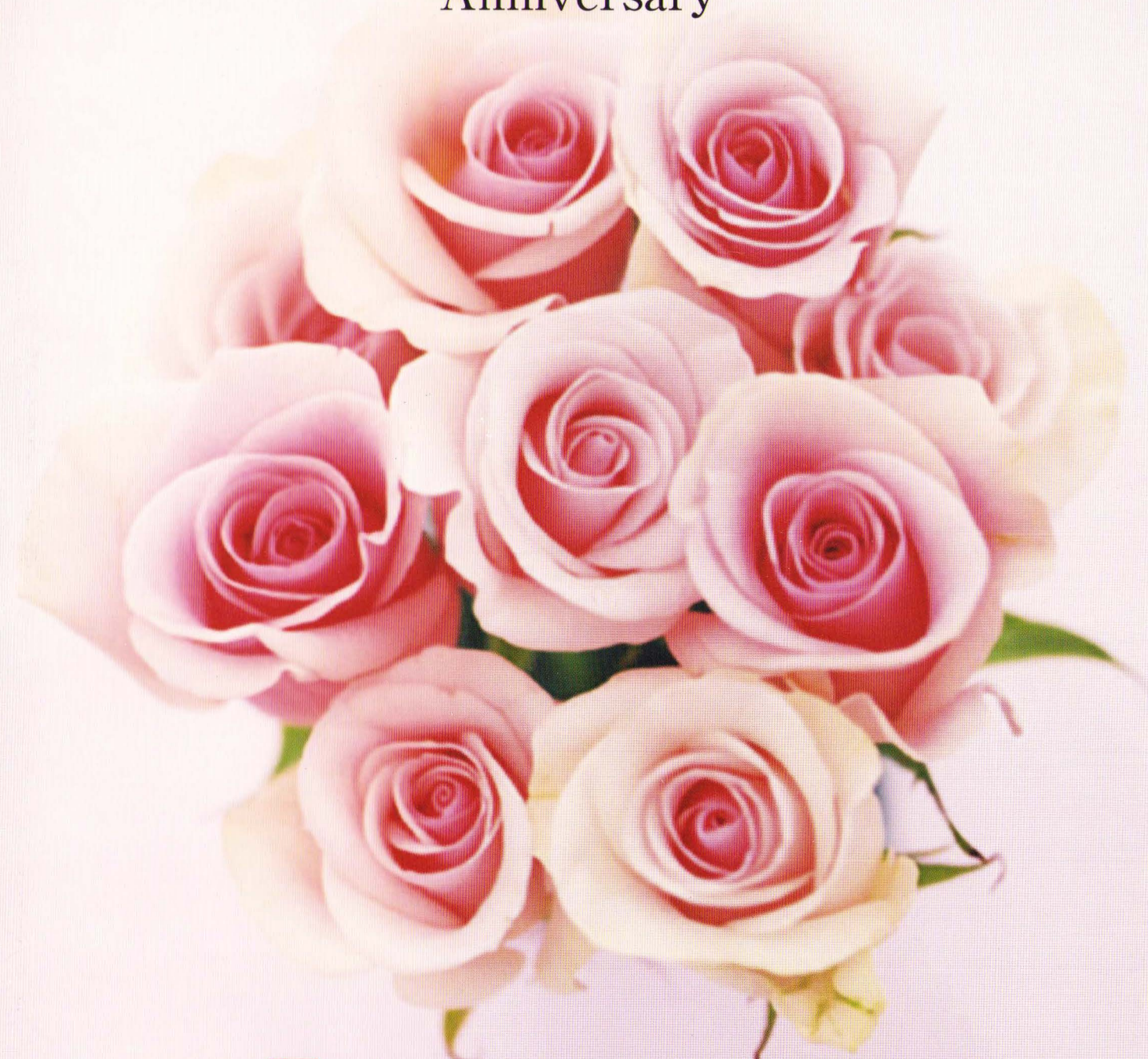


音楽を聴く喜びが、生きる喜びに変わる



【発行日】2007年11月25日
【編集発行】ヴォイス・ファクトリー株式会社
東京都渋谷区本町1-4-3-206 TEL:03-5388-0041
<http://www.voice-factory.com>
※無断転載・複製を禁じます。落丁・乱丁本はお取替えいたします。

50th
Anniversary



F i o r e n z a
C o s s o t t o
フィオレンツァ・コッソット

Message



photo K. Miura

Carissimi Amici,

Con queste poche parole esprimo tutta la mia riconoscenza e gratitudine per il tanto affetto e la grande stima che mi avete sempre dimostrato in tutti questi anni.

Il 2007, per me, è un anno indimenticabile perché festeggio i miei 50 anni di carriera, un traguardo memorabile nella vita di una persona ma soprattutto di un cantante lirico. Ho iniziato quest'anno in Giappone e lo finisco sempre qui; e sono felice e onorata di brindare insieme con Voi a questo evento eccezionale.

Con immenso affetto un abbraccio a tutto il Giappone

Fiorenza Cossotto

愛する友人の皆さまへ

少ない言葉ながら、皆様がこの長い年月にわたり私にお示し下さる、変わらぬ深い愛情と大きな敬意に対して、心からの感謝の気持ちをお伝え致します。

一人の人間として、そして何よりオペラ歌手としての人生において、キャリア50年という記念すべき節目を迎えることができ、2007年は私にとって忘れ得ない年となりました。その年を私は日本で迎え、こうして再び日本で締めくくるのです。

皆様とご一緒に祝杯をあげることのできるこの特別な瞬間(とき)を、私は幸せに、そして光榮に思います。

限りない愛を込めて、日本の全てを抱きしめながら。

フィオレンツァ・コッソット

Messaggio

Mi è gradito inviare questo messaggio augurale, a nome dell'Ambasciata d'Italia in Giappone, e mio personale, in occasione della serie di concerti che Fiorenza Cossotto terrà in Tokyo ed Osaka per commemorare il 50mo anniversario delle sue attività artistiche.

Dopo il debutto nel 1957 a Milano presso il Teatro alla Scala, la celeberrima mezzosoprano italiana ha continuato a conquistare, uno dopo l'altro, i maggiori teatri d'opera non solo in Italia ma anche nel mondo. In particolare, ha suscitato e suscita ammirazione e entusiasmo in Giappone, dove la sua è una presenza costante e significativa nel panorama musicale contemporaneo e la accolgono sempre molto calorosamente i suoi fedelissimi ammiratori.

Sono certo che anche quest'anno i suoi concerti saranno coronati da un grande successo, e mi unisco al pubblico giapponese nell'esprimere il mio più sincero augurio e ringraziamento.

L'Ambasciatore d'Italia
(Mario Bova)



メッセージ

このたびフィオレンツァ・コッソットさんのデビュー50周年記念公演が東京・大阪で開催されるのにあたり、在日イタリア大使館として、また私個人として、このお喜びのメッセージをお送りします。

1957年、ミラノのスカラ座でデビューを飾って以来、このイタリアの有名なメゾ・ソプラノは、イタリアのみならず、世界中の名門歌劇場を次々と制覇して行きました。とりわけ、日本でもこれまで称賛と熱狂を引起こしてきましたが、今なおそうです。この国の現代の音楽シーンの中でのコッソットさんのプレゼンスは不動かつ意義深いものであり、年来の熱心なファンの皆さんに常にとても暖かく迎えられているのです。

今年のコンサートも大成功を収めることを確信すると共に、日本の聴衆の方々と一緒になって、私も心からのお喜びと感謝の気持ちを表したいと思います。

駐日イタリア大使
マリオ・ボーヴァ

Message

ごあいさつ



ヴォイス・ファクトリー株式会社
代表取締役
輪嶋 東太郎

不世出のメゾ・ソプラノ、フィオレンツァ・コッソットの「デビュー50年記念公演」という大事業に携わらせていただく喜びは、この場で語りつくすことはできません。

フィオレンツァ・コッソットの歌、それは「歌ではない。愛そのもの」、私はそう思っています。そしてヴォイス・ファクトリーが2001年から毎年彼女を招聘し続けてきた理由はその一点に尽きます。彼女のデビュー50年という節目に際し、彼女の音楽の「真の偉大さ」を、少しでも伝えたい、そう思いこれまでの貴重なフォトグラフなどを用いたこの記念プログラムを作成することにいたしました。その音楽を生み出す彼女の魂…。本プログラムに収録された、いまでも少女のように輝く曇りのない純粋な目、そして自分に対する異常なまでの厳しさを表す彼女自身の言葉の中に、その全てが集約されていると思ったからです。

あらゆるジャンルを越えて「本物の芸術」から人間は「愛」を受け取り、この世を生きていくために必要な力を与えられるのだと思います。そしてそれは、海や空や山といった大自然を批評することに意味を持たないのと同様、それに接することそのものが感動的であり、幸福なことなのだと思います。ここ数年彼女の歌に接して下さった多くの方々も、きっとそう感じていらっしゃる、私は信じています。

高齢化を迎える日本は、彼女と同世代の人口が急速に増えていく一方で、人々の繋がりがどんどん希薄になり、愛すること、愛されることへの実感を失いつつあります。だからこそ私は、彼女の命が続く限り、そして彼女が歌に人生をかけ続ける限り、私たち聴衆にその歌を聞かせ続けてもらいたいと願わずにいられません。

ここに一枚の写真があります。20年前、大学を卒業したばかりの私が初めてコッソットさんの演奏に接した公演後、サインに並んだときに撮っていただいたものです。子どもの頃から10年以上も待ち焦がれた彼女の来日。自分の番となり、サインをお願いする色紙を差し出したとき、緊張と感動で手が震えていたのを覚えています。20年後にこのような日が来るなどという運命は、このとき、私はもとよりコッソットさんご自身も想像だにしていなかったことでしょう。人生とは不思議な縁に導かれるものです。

歌う芸術家、フィオレンツァ・コッソットの人生において記念すべき、この演奏会にお越しいただいた皆様にとりまして、今日という日が記念すべき瞬間(とき)となることを願っております。彼女の音楽を通し、生きる喜びを実感していただける演奏会となれば、主催者としてそれ以上の喜びはございません。公演実現にご協力いただきました全ての皆様、ご来場いただきましたお客様に心から御礼申し上げます。そして本日この会場で人生の瞬間を共有する全ての方々の幸せを心からお祈り致します。



Congratulations

お祝いメッセージ

富士 眞奈美 女優

デビュー50周年記念公演おめでとうございます。半世紀にわたり歌い続けていらっしゃるとはなんと素晴らしい歌手人生でしょう。コッソットさんの姿勢は、いつも「聴衆のために歌う」といことでした。最盛期、これでもかと言うほどの歌声が鳴り響いた時も…そして今、円熟期に入りしみじみと人々の心に染み入るように歌いかける時も…いつだって、我らファンのために歌ってくださっていたのです。その歌声は、慈愛に満ちているといっても過言ではない。アズチーナもサントゥツァアもアムネリスも、深い解釈に支えられて、益々コッソットさんのものとなり、聴いている私の頬にはいつの間にか涙が流れているのです。年毎に感動が深くなっています。長く長く歌い続けてくださいませ。

吉行 和子 女優

フィオレンツァ・コッソットさんのリサイタルをはじめて聴いたときの感動は、言葉では言い表わしがたかった。そこには人生があった。歌声の中から、その心はこちらの胸を熱くした。こういう経験が与えられた幸せを、深く感謝したい気持ちになった。

デヴィスカルノ

50周年おめでとうございます。メゾ・ソプラノとして史上最高、奇跡の歌声、不世出の大歌手…賛辞の嵐を巻き起こしているフィオレンツァ・コッソット、オペラ史に残るこの記念公演は、あなたの心に永遠にその歌声を刻みつけることでしょう。

佐藤 陽子 バイオリニスト

オペラ歌手デビュー50周年を迎えられるのは、真に驚異である。しかも少しの声の衰えも見えないどころか更なる円熟の芸を見させ、聞かせてくれる。実は33年前のある晴れた日、私はローマのキュイリナーレ・ホテルのスイート・ルーム、かの世紀のプリマドンナ、マリア・カラス先生にコッソット女史を紹介され、同席されていた名テナー、ジョゼッペ・ディ・ステファノ氏と3人でオペラの演じ方について語られていたのを側で何時間か聞いていた貴重な深い思い出がある。主にアイータにおける役どころの話であった。あの頃は、パレリーナとオペラ歌手は本当に寿命が短かった。ところが、マーヤ・プリセツカヤ、フィオレンツァ・コッソット女史と歴史を変えてくれる大スターが出現されたから、命ある限り諦めるなという心の支えになる。11月のコンサート、本当に楽しみです。

林 康子 ソプラノ歌手

フィオレンツァさんとの初共演は1983年「トロヴァトーレ」のヴェローナの引越し公演がスイスのルガーノでされた時。思いがけず非常に親切にして頂き感激でした。その後7都市で30回近い共演をさせて頂き「ヤスコ・ヤスコ」と可愛がって頂きました。彼女の素晴らしい声と役作りはイタリアの伝統的な基礎に基づき、声のテクニックや舞台語発音の素晴らしいさは誰にも追従を許しません。練習追求の鬼とまで思われるお人柄は近くで歌いながら、色々なことを学ばせて頂き感謝しています。彼女を超えるメゾは一体いつ排出されることか？私を満足させてくれる人はフィオレンツァを越えて今も見つかりません。

江原 啓之 スピリチュアル・カウンセラー

デビュー50周年を記念した公演の開催、誠にありがとうございます。コッソットさんのアズチーナ役などいくつかの公演を拝見しています。オペラ歌手の宿命とともに声に声があるのが普通ですが、しかし驚くことに、彼女はそれ以上に内面の充実を感じさせる驚異の表現力を持っています。目や手の動きひとつひとつにも神経を注いで歌われる様子は見事で一瞬たりとも目が離せません。物語の人物像を鮮やかに顕現させる表現力は必見でしょう。

原田 悠里 演歌歌手

学生時代に声楽を学んでいた頃、マリア・カラスとコッソットさんが憧れの人でした。活躍期間も短くセンセーショナルに駆け抜けたカラスの生涯と対照的に、堂々と50周年という驚異的な節目を迎えられたコッソットさんに畏敬の念を禁じえません。優しさの中に激しさを、大らかにして繊細なその歌声の中に私自身の音楽人生を映してみたいと、ワクワクしながらその時を待っています。

長江 幸昭 (株)デアコスメディックス

初めにコッソットさんに「デビュー50周年記念公演」のお祝いを申し上げます。1970年代にNHKによるイタリア歌劇公演で鳥肌が立つ興奮を覚えた「ノルマ」、「アイータ」以来のコッソットファンの1人であった私が2001年東京での7年ぶりのリサイタルで以前にも増した圧倒的声量と存在感そして年齢を重ねた「声の輝き」に30年前と同じ感動を覚えたことが「コッソットさん」そして「ヴォイス・ファクトリー」とのご縁の始まりでした。1960年代からのオペラファンの私に神が与えてくれたようなご縁が、その後2002年リサイタル、2003年「イル・トロヴァトーレ」の公演に個人として協賛させて頂く幸運に恵まれオペラファンとしては最高の賛沢と至福を経験させて頂きました。また2004年にはコッソットさんとして初めての台湾でのリサイタルも台湾の知人、友人の協力をお願いし実現したことも私の大切な思い出であります。実に50年に亘り世界のオペラ界でトップレベルを維持されるための鍛錬と努力は計り知れませんが、ステージではそのような苦労は全く感じさせませんし、またステージを離れての人間味溢れる温かさ、寛容さなど私が学ぶことが多々ありました。2001年以後、大歌手コッソットさんと交友させて頂けたことを心から感謝申し上げ、生涯現役を応援したいと思います。

長谷川 芳弘 NHK音楽・伝統芸能番組部長

1987年10月、藤原歌劇団の公演、歌劇「トロヴァトーレ」のテレビ収録を私は担当しました。第2幕、アンヴィル・コーラスに続いてアズチーナのアリア「炎は燃えて」の歌声が東京文化会館に鳴り響きました。熱唱に感激した聴衆の拍手が鳴りやまず、約2分以上も続きました。数多くのオペラを経験した私にとっても、忘れられない体験でした。

葛西 弘生 NHK音楽・伝統芸能番組部チーフ・プロデューサー

デビュー50周年、心からお祝い申し上げます。初めてお会いしたのは、今年のNHKニューイヤーパーコンサートの特典ゲストとしてご出演いただいた際でした。とても優しい柔らかな方という第一印象でしたが、舞台上上がると一変、その圧倒的な存在感と歌の迫力に全身鳥肌がたったのを憶えています。「歌う」ことの本質を感じさせてくれたことにとても感謝しています。これからも世界中に「生の喜び」を届けてください。

知中 良輔 音楽評論家

オペラ上演史の中で、メゾ・ソプラノといえば、バルビエリやシモナートが私達を魅了していた。しかしフィオレンツァ・コッソット出現以来、メゾソプラノの様相は全く変わってしまった。なんという巨大なスケールの持主、声の偉力の絶対的力成り。そして何より輝かしい高音から低音への幅広い声域の驚異的な魔力！私は60年代、ザルツブルクでカラヤン棒の彼女のエボリ姫を何度も観・聴き、圧倒されっぱなしだった。彼女のパワフルなステージの魅力は今だ衰えを知らない。まさに声の奇蹟！いや声だけでなくその姿の艶やかで美しいことこれも奇蹟か！

(順不同・敬称略)



Profile

プロフィール

フィオレンツァ・コッソット

メゾ・ソプラノ

Fiorenza Cossotto

1935年、トリノ郊外のクレシェンティーノに生まれる。トリノ音楽院を卒業後スカラ座の研修生となり、わずか22歳の1957年に同歌劇場でデビュー。同年「夢遊病の女」などで伝説的プリマドンナ、マリア・カラスと共演（カラスとは、最後の舞台となったバリ・オペラ座「ノルマ」の他、度々共演している）。61年にスカラ座において、そのシーズンのオープニングの夜、急病により出演不可能となったシミオナートの代役として急遽「ラ・ファヴォリータ」のレオノーラを歌ってセンセーショナルな成功を収め、一躍世界にその存在が知られた。更に翌年アレーナ・ディ・ヴェローナでの「アイーダ」（アムネリス役）の大成功により、イタリア・オペラ界最高のメゾ・ソプラノとしての地位を不動のものとした。

以後、メゾ・ソプラノの音域を超えた高音、大理石を思わせる低音、さらに凄まじいまでの感情表現を武器に世界の歌劇場を席捲、数々の伝説的名舞台を残す。ベルカントからベリズモにいたるまでの驚異的広範囲なレパートリーの中でも、ベッリーニ「ノルマ」（アダルジーザ）、ドニゼッティ「ラ・ファヴォリータ」（レオノーラ）、ヴェルディの「アイーダ」（アムネリス）、「トロヴァトーレ」（アズチーナ）、「ドン・カルロ」（エボリ）、また「カバレリア・ルスティカーナ」（サントゥツァ）、「アドリアーナ・ルクブルール」（ブイヨン公爵夫人）などの諸役は、他の追随を許さない、イタリア・オペラ史最高の演奏と称えられている。

1971年NHKの招いた第6回イタリア歌劇団公演で「ノルマ」と「ラ・ファヴォリータ」に出演し我国に初登場、それ以後同公演第7回「アイーダ」、第8回「カバレリア・ルスティカーナ」、「アドリアーナ・ルクブルール」に出演、いずれも日本の音楽界に衝撃を与える名舞台となった。さらに数年の不調を乗り越え、藤原歌劇団に客演して歌った「イル・トロヴァトーレ」アズチーナ役でも会場を熱狂に巻き込む白熱の舞台を繰り広げ、その模様はNHKの放送を通し全国のオペラ・ファンを魅了した。その後も91年アレーナ・ディ・ヴェローナ日本公演の「アイーダ」、ボローニャ市立歌劇場の「アドリアーナ・ルクブルール」、小澤征爾指揮の「ファルスタッフ」で来日を重ねた。

2001年からはヴォイス・ファクトリーの招聘で毎年日本を訪れ、各地でピアノ伴奏によるリサイタルを開催、毎回全聴衆を熱狂に導いている。更にオーケストラとの共演で「イル・トロヴァトーレ」（2003年）、「アイーダ」（2004年）の演奏会形式上演にも出演して圧倒的な成功を収めた。またデビュー50周年にあたる今年年頭、NHKニューイヤーオペラコンサートに特別ゲスト出演、「イル・トロヴァトーレ」のアリアを歌って、聴衆を驚愕させたのは記憶に新しい。

70歳を越えてなお衰えを感じさせない豊かな声と圧倒的な存在感、年齢を重ねるごとに深さを増す表現、そして何よりもその歌を支える精神の佇まいに新たな感動が広がっている。20世紀、21世紀の2つの世紀にまたがり第一線であり続ける、まさに「音楽界の奇跡」と呼ぶに相応しいイタリア・オペラ黄金期最後のプリマドンナである。

Fiorenza Cossotto
2004

Cossotto by her own words.

コッソットが語る音楽、人生、魂

ドニゼッティ「ラ・ファウオリータ」
レオノーラ役

私が初めて日本に来たときも、歌ったのは「ラ・ファウオリータ」でした。そのとき確かこのオペラは日本初演。ブッチャーニやヴェルディのオペラほど知られた作品ではないし、当時は字幕もありませんでしたから、正直聴衆の皆さんが理解してくださるか不安でした。しかし、今でも忘れられないのはあのときの日本の聴衆の皆さんの熱狂振りです。終幕のカーテンコールのときに、若いファンの方が「ブラーヴァ・コッソット」と書かれた大きな布を振りながらハンカチで涙をぬぐっている。あまりの熱狂と拍手に、そのとき指揮をなされたマエストロ、デ・ファブリティス（彼はいつも冗談を言って周囲を笑わせる人でした）が、緞帳の前でいたずらっぽく、からかうような顔をして「フィオレンツァ、これほどのサクラを雇うのに一体いくらかった？」って聞くのです。「マエストロ、私は日本に知り合いはひとりもないのよ！」って、二人で笑いあったのを覚えています。いまでも昨日のこのように思い出します。



最初にスカラ座で、シミオナートの代役「ラ・ファウオリータ」を歌ったあの晩のことは、一生忘れられません。その日は朝から夜の6時までピッコロ・スカラでの別の公演のリハーサルをして、くたくたになって家に帰りました。もうご飯を食べる元気もなく。『ママ、今日はスープだけにします』と言って、スープが出てくるのを待っていたとき、スカラ座の総支配人ギリンゲッリさんから電話があったの。『フィオレンツァちゃん、いまからちょっと劇場においで』、そう言われて、私は何にも告げられずに車でスカラ座に向かいました。車を降りた楽屋口のところで、カツラや衣裳の係りの人たちが待ち構えていて、私が自分の楽屋にたどり着いたときには、もうすっかりレオノーラにされていたのよ（笑）。そしてその段階で、劇場にアナウンスが流れたの。『本日シミオナートが急病のため、若手のコッソットが代役を務めます』、その知らせに劇場全体から「ウー」という失望の声がして、それが私の楽屋にも聞こえました。それまで死ぬほど不安だったのに、その聴衆の落胆のため息を聞いたとたん「よーし、私だって一生懸命に勉強してきたんだから！」と物凄い力が湧いてきたの。私はきつと逆境に強いのかも知れませんね。公演が終了するとき、スカラ座中が熱狂して、翌日新聞はこぞって「スターの誕生!!」と大騒ぎ。翌朝、いつものように、ピッコロ・スカラのリハーサルに行くと、一緒にリハーサルをしていた仲間達に迎えられて。ミレッラ（フレニー）は「フィオレンツァ、昨日私たちと別れてからいままでのたった半日で、一体何をしてくだしたのよ!？」と抱きついて祝福してくれました。そして、その日から私の人生が変わりました。

「アイーダ」の録音風景
左より フランド・ドミンゴ、一人おいて ピエロ・カッパッチェリ、フィオレンツァ・コッソット、リカルド・ムーティ

私は歌手として劇場で育てていただきました。私の時代、劇場が学校でした。そこではカラス、テバルディ、デル・モナコ、バステリアニーニ、ティト・ゴッビ、挙げればきりが無いほど偉大な「歌う芸術家」の姿に毎日接することができたのです。またセラフィン、ガヴァツェーニなど、作曲家を心から尊敬する偉大な指揮者（マエストロ）たちがいました。彼らのリハーサルを客席から見ているだけで、どれほど多くのことを学ぶことができたことでしょうか。いまは時代が変わってしまったかもしれませんが。そのような時代に生まれた私は幸いです。

カール・ベームさんはとっても面白い人でした。初めて私のリハーサルをお聞きになったとき、真剣な顔して寄って来られるから「どうしたのかしら」と思っていたら「おい、コッソット、隠しているマイクはどこだ」ですって（笑）。本当に褒めてくださいました。



ヴェルディ「アイーダ」アムネリス役

アイーダとトロヴァトーレは、それぞれ500回以上歌っています。500回を越えたとき、いつの間にか数えるのをやめてしまいました、もうそれも随分と前のことですけど（笑）。アムネリスはアイーダをいじめるひどい女で、意地悪な悪役だと思われるけれど、違います。彼女も心からラダメスを愛しているが、その思いが叶えられないのです。そして彼女はまだまだ若い、しかも苦勞を知らない少女。同じ立場になったら、女性ならほとんどが彼女と同じ心や感情を抱くはず。彼女も本当はとても純粋な女性。そして死んでいくラダメスを思いながら「どうか安らかに」と祈る彼女の言葉がこのオペラの最後を飾るのです。ヴェルディはそこに大きな思いを込めたに違いありません。



Opera

世界初公開

1965年パリのオペラ座での「ノルマ」舞台袖でマリア・カラスと共に。

マリア・カラスのような偉大な芸術家と舞台を共にできたことは本当に幸せで、光栄なことです。スカラ座の「夢遊病の女」で、代役としていきなり彼女のお母さん役でデビューしたのです。そのときの舞台写真が残っていますが、彼女のお母さんを演じながら、憧れでポーとしながら彼女を見つめている私が写っています(笑)。カラス最後の「ノルマ」となったパリで共演させていただいた舞台も一生忘れられません。「ノルマ」での私の役、アダルジーザの出番は2幕で終るのですが、「フィオレンツァ」の出番が終っても帰らずに最後まで残っていてね。最後に一緒にカーテンコールに出ましよう」と言ってくれて。その言葉、私の心の中の宝物です。



次に生まれ変わってきたら、ソプラノ歌手になりたいと思います。どうしても露々夫人を歌いたいから。でも、チョウチョウさんを私はあまりにも愛しているので、彼女の心を感じるあまり舞台上で泣いてしまっ、最後まで歌いきることはできないかもしれない。そう思ったりもします。



トロヴァトーレのアズチーナは、本当に人間的な役です。ヴェルディが書いたこの役の音楽にはおよそ全ての感情が存在します。母親を火あぶりにされた憎しみ、その母への娘としての想い、子どもを誤って焼き殺してしまった恐ろしい過去を抱えながら、敵の子を我が子として育てる抵抗しがたい母性、故郷へのノスタルジー……。いまでも歌うたびに、毎回新しい発見があります。そしてその度にヴェルディの偉大さを思い知らされ感動してしまいます。

ヴェルディ「イル・トロヴァトーレ」アズチーナ役

Cossotto by her own words.

コッソットが語る音楽、人生、魂



マスカーニ「カヴァレリア・ルスティカーナ」サントウツツア役

ヴェルディ「ドン・カルロ」エボリ公妃役

ビゼー「カルメン」ホルメン役

ベッリニ「ノルマ」アダルジーザ役

チレア「アドリアーナ・ルクブルール」フィヨン公爵夫人役

Cossotto by her own words.

コッソットが語る音楽、人生、魂

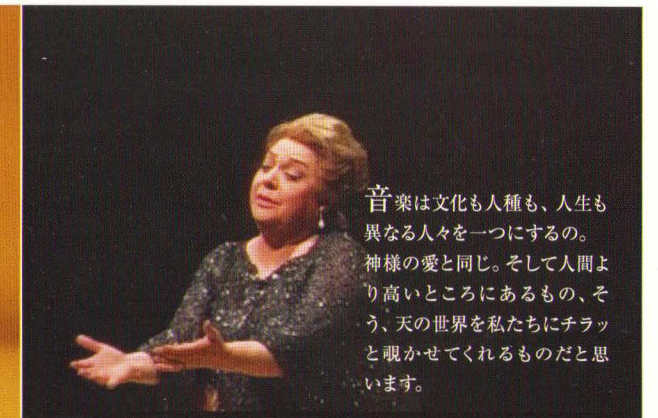
目の見えない人には音だけで表情を感じてもらえるように、耳の聞こえない人には、私の目や表情で音楽が聞こえるように、いつも、そう思いながら歌っています。

会場には、毎回必ず、その日初めてクラシック音楽やオペラに接するという人がいるのよ。私たちは、そういう人がオペラや音楽を好きになってくれるように全身全霊で舞台を務めなければなりません。

人間は心が完全に裸になっていなければ舞台の上で何かを表現することはできない、そう思います。でも「自分は目の前にいる人に愛されている」と思えて、そういう安心感に包まれなければ、心が裸になるのは難しいのです、少なくとも私は。そして「愛されたい」なら、まず自分から相手を愛さなければならない、そう思っています。だから、私は舞台に出た瞬間から、会場にいる全ての人に「私はあなたを心から愛しています」という思いを、全身で伝えたいと思っています。皆さんの愛に包まれたときに初めて、私が何かを表現できるのです。



例えば会場に空席があっても、悲しむことはないのよ。そこには、その日演奏させていただく曲をこの世に残してくれた偉大な作曲家たちをはじめ、私の先輩達、そして先に天に召されていった音楽ファンが座っているの。だから、その席に誰もいないなんて思っはいけないのです。



音楽は文化も人種も、人生も異なる人々を一つにするの。神様の愛と同じ。そして人間より高いところにあるもの、そう、天の世界を私たちにチラッと覗かせてくれるものだと思います。



舞台の上で死にたい。そう思います。私はきっと最後の瞬間まで、歌い続けていくでしょう、それがお客様の前であるかどうかは別としても。歌うことは私にとって仕事ではなく、生きていくことそのものなのですから。



声乐を学ぶ学生達に対するマスタークラス（公開講座）でー私を「先生」と呼ばないでね、「フィオレンツァ」で良いのだから。だって偉大な音楽の前では、私は今でも学生です。皆さんと同じように毎日勉強を続けている身だから、立場は皆さんと同じなの。でもあなたたちと違うのは、経験です。だから私が身に付けた経験をどんどん私から奪い取ってください。

コンサートの成功と、自分の演奏に対する満足とは全然違います。どれほど聴衆が熱狂しても、恐らく自分の演奏に満足する日は、一生来ないのじゃないかしら。

人生の経験と共に、以前に比べて歌の中にある「音」よりも、「言葉」が伝えようとするドラマを表現することに、より心を注ぐようになったように感じます。

私は素晴らしい両親に恵まれました。親の愛を受けられない人がたくさんいることは、本当に辛いことです。私が初めてオペラの脇役としてレコーディングしたときのギャラは、本当に少ないものでしたけれど、私はそれを「一番小さな単位のお礼で下さい」ってお願いしたの。そうするとたくさんの量に見えるでしょ(笑)。それを胸に抱えて帰ったの、母に見せるのが待ちきれなくて…。そう、私はいつも父と母の喜ぶ姿を見て一生懸命でした。

Cossotto by her own words.

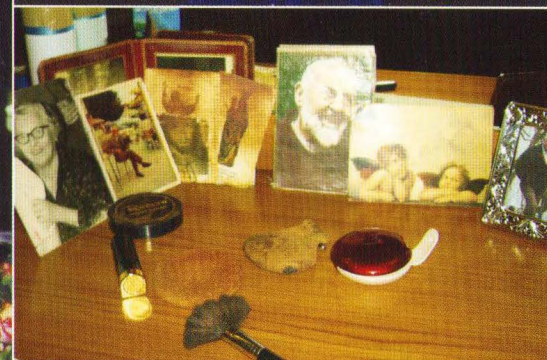
コッソットが語る音楽、人生、魂

よく人に「あなたにはカリスマがある」とか「オーラがある」とか言われます。でも自分ではそれに気がつかないし、自分のことは分かりません(笑)。でも他の人を見ていて、そういうものを持っている人のことは分かるような気がします。そしてそのような人に共通しているものがあるように思うのです。「自分のしていることを確信して生きている人」。



私はファンの皆さんが私の為に持ってきてくださったお花を決して粗末にしません。もちろん、私はお花を愛していますが、皆さんがくださるお花は、ただ単にお花ではないのです。皆さんの心そのもの。それぞれの花が一生懸命咲いて、そしてその花の命を、私の為に皆さんがくださるのですから。

(コッソットさんはいただいた全てのお花を、ホテルに持って帰られます。本番の終わった日、どんなに遅くにホテルに帰っても、それから、全てのお花に水揚げをして、枯れるまで滞在中お部屋で大切にいらしゃいます。そのお花が枯れる前にホテルを移動しなければならないときには、必ず新幹線や飛行機に乗る前にそのお花を教会に持っていき、聖母さまに捧げて行かれます。そして日本を発たれる前にホテルで咲いている花は「母のお墓に持っていく」とイタリアに持って帰られます。)



コッソットさんの楽屋にはいつもご両親やお兄様の写真が一緒です。

Cossotto by her own words.

コッソットが語る音楽、人生、魂



私がこの声を与えられ、オペラ歌手になったのは、神様の意思だと思うのです。あなたとこうして出会えたのも、神様のご意思です。「信じる」というのは「疑いを持たない」ということ。人を信じる時も同じ。周囲の人がその人に対してどんなことを言おうとも、そんな雑音に惑わされては、信じたことにならないの。

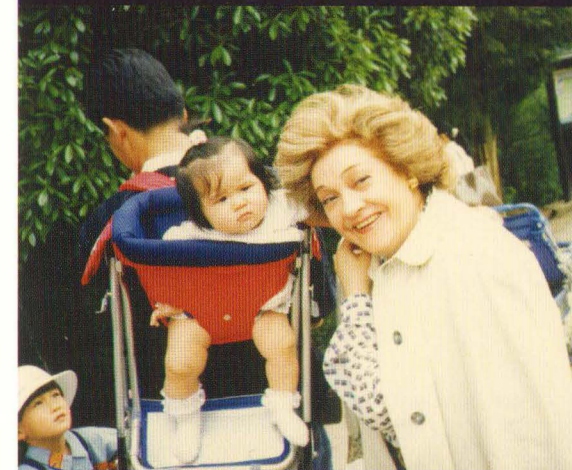
多くの人が、私を「異常なほどの勉強家」とか「狂ったように一音一音をチェックする」とか言われます。舞台上に立ったとき、テクニク的なことに少しでも不安があると、音楽に集中して心を表現することができなくなります。でも一つのオペラ、一つの曲の中には、歌い手にとって本当に大変なフレーズや音がいっぱいあります。そのためには練習するしかないのです。

長く歌ってこられた秘訣？それはまず、シンプルに暮らすこと。私は田舎で育ったので、オペラの世界に身をおくようになっても、華やかな社交やパーティといったものとは無縁で暮らしてきました。ヴェルディも田舎の土を愛した素朴な人でしたよ。それから、いつもいつもまじめに勉強し続けています。でもそれは私にとっては当たり前のことで、ちっとも苦になるようなことはありません。だって音楽をとっても愛しているから、勉強せずにはいられないの。



奈良で

最初に来たときから、日本にはなんだか不思議な感覚を感じるの。どこかで一度この国をすでに知っていたような。日本是我的第二の故郷。日本とのその後のこれほどの深いご縁を考えると、私はきっと前世で日本人だったのだと、真剣に思っています。



私は、このような年齢になっても、自分の中身は、幼児のままだと感じるの。だから、小さい子ども達とはすぐにお友達になれるのです（笑）。子ども達も分かるのよ、きっと本能で。「この子、体は大きいけど自分達とおなじだ」って。



京都で



『荒城の月』の作詞家、土井晩翠の銅像の前で。（仙台で）



年齢を重ね、人生が深くなるにつれて、私の歌も当然変わってきているのだと思います。若いときよりも心が自由になり、今は歌うことにただ喜びだけを見出しています。

若いときには感じるができなかったものや、伝えられなかったもの、そのような何かで、若かったときの何倍も輝くことができます。そう思えるようになりました。私はいま、第二の青春、いや、ひょっとすると本当の青春を謳歌しているのかもしれない。

Contribution

特別寄稿

江川 昭子
ジャーナリスト

Shoko Egawa

彼女がコンサートの舞台に現れる。中央で歩みを止め、聴衆の拍手に微笑みで答える。

そこまでの彼女は、フィオレンツァ・コッソットその人。拍手が収まり、音楽がなり始める瞬間、彼女はふっと目を閉じる。これが、変身のおまじない。再び目を開けた時、彼女はもうコッソットではない。いつの間にかオペラの世界が立ち現れて、アズチーナが、アムネリスが、サントウツァがそこにいるのだ。セットがあるわけでも、役に合わせた衣装を着ているわけでもないのに……。

今年1月、NHKニューイヤー・オペラコンサートに特別出演した時も、彼女が歌い出すや、ホールは《トロヴァトーレ》の世界と化した。歌が終わった後、興奮した聴衆の熱い拍手と歓声は、生放送で中継しているために次への展開を急ぐ司会のアナウンサーが出てきても、なかなか鳴りやまなかった。

後日、インタビューに応じてくださったコッソットさんによれば、「本当に、アズチーナの中に自分自身が入り込んでいるというか、自分自身がアズチーナそのものだと思って歌っています」とのこと。

「歌い終わっても、すぐに素の自分には戻れません。徐々にお客様が引き戻してくださるんですね。拍手がなければ、役の世界に行っただけで、戻って来られないかもしれません」と、いたずらっぽく笑った。

肉体は、年を重ねるにつれて衰える。けれども、役に入り込み、その思いや音符に込められた深い意味を表現する力は、際限なく進化していけることを、彼女は身をもって示している。そして、この表現力こそが、何より人々を感動させるのだということ。

70歳を過ぎて今なお進化し続ける秘訣を聞くと、彼女は「自分で申し上げるのは大変恐縮ですが」と遠慮がちに、こう言った。

「うんと勉強をします」

これまで何十回、何百回歌ってきた作品でも、練習を重ね、それを録音して聞きながら修正をし、本番に臨む。自分自身を知ることで、本番では常に「今、最高の自分」を出すことができるのだろう。自分自身を見つめるのが辛い時もあるに違いない。けれども、彼女はそういう辛さや苦労を口にしない。代わりに、彼女から頻繁に出てきた言葉は、「愛」と「感謝」だった。役に対する「愛」、「お客様からいただいた愛」への「感謝」と「お客様への愛」、そして「長持ちする楽器を与えてくださった神様」への「感謝」……言葉だけではない。客から贈られた花はすべてホテルの自室に飾る。翌日移動しなければならない場合は、教会に持って行ってマリア様に捧げる。

ああ、この人はこんなにも音楽を愛し、音楽を愛する人々を愛しているのだ――。

そんなコッソットさんのデビュー50年を心からお祝いしたい。そして、51年目も52年目も、彼女はさらに進化した歌を聞かせて下さると信じている。



50周年記念公演

Fiorenza Cossotto Recital 2007

ピアノ伴奏で、イタリア・古典歌曲から日本歌曲、オペラアリアまで。

ピアノ：呉 恵珠

第1部

モーツァルト 「フィガロの結婚」から
“自分で自分がわからない” “恋の悩みを知る君は”ヘンデル
なつかしい木陰よ (オンブラ・マイ・フ)山田 耕祥
荒城の月 からたちの花ジョルダニ
カロ・ミオ・ベンフランク
天使の糧マルティニ
愛の喜びはビッチニ 「良い娘」から
“頭にくる高慢ちき”

第2部

マスカーニ 「カヴァレリア・ルスティカーナ」から
“ママも知るとおり”チレア 「アドリアーナ・ルクブルール」から
“苦い喜び、甘い苦しみ”ヴェルディ「アイダ」4幕1場 アムネリスのモノローグ
“ああ、生きた心地がしない”

大阪公演

日時：2007年11月10日（土）14:00開演（13:30開場）

会場：いずみホール

出演：フィオレンツァ・コッソット（Ms）、呉恵珠（Pf）

主催：ヴォイス・ファクトリー株式会社

協賛：いずみホール

後援：イタリア大使館

協力：アリタリア航空

札幌公演

日時：2007年12月5日（水）19:00開演（18:30開場）

会場：札幌コンサートホールKitara

出演：フィオレンツァ・コッソット（Ms）、呉恵珠（Pf）

主催：北海道新聞社、道新スポーツ、道新文化事業社、北海道芸協

後援：札幌市、札幌市教育委員会

協力：オントナ

特別協力：札幌コンサートホール

50周年記念公演

ヴェルディオペラの真髄 Il Trovatore イル・トロヴァトーレ

演奏会形式全曲上演

歴史に残るコッソット最大の当たり役、凄まじい名唱
史上最高と評される、コッソットが演じるジブシーの老女アズチーナ。
主役四人に超一流のオペラ歌手が揃わないと上演が難しい
ヴェルディ中期の最高傑作「イル・トロヴァトーレ」。
コッソットが認める超実力派が世界から集まり実現する声の饗宴です。

「イル・トロヴァトーレ」

日時：2007年11月25日(日) 15:00開演(14:30開場) 会場：Bunkamuraオーチャードホール

出演：アズチーナ……フィオレンツァ・コッソット(Ms)
ルーナ伯爵……スック・サンゲン(石 常根)(Br)
レオノーラ……バルバラ・ザルノヴィツカ(S)
マンリーコ……ハ・ソクベ(河 碩陪)(T)
フェランド……リ・ジェジュン(李 在浚)(B)
イネス……永安淑美
ルイズ……真野郁夫
使者……柿迫秀
老ジブシー……大塚博章

指揮：ニコレッタ・コンティ
演奏：東京フィルハーモニー交響楽団／東京オペラシンガーズ
演出：大島尚志
舞台監督：手塚優子
照明：中村浩実
字幕：大島雅子
字幕操作：三宅均(株式会社ティーイーエス)
主催：ヴォイス・ファクトリー株式会社／朝日新聞社
後援：イタリア大使館、駐日韓国大使館 韓国文化院
協力：アリタリア航空

50周年記念公演

記念ガラコンサート Fiorenza Cossotto Gala Concert

音楽史に残る50年の歩みをオーケストラ伴奏によるオペラアリアに乗せてお送りします。
この記念すべき瞬間を共に…。

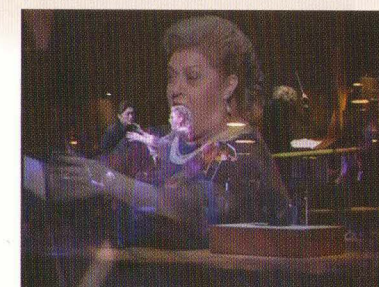
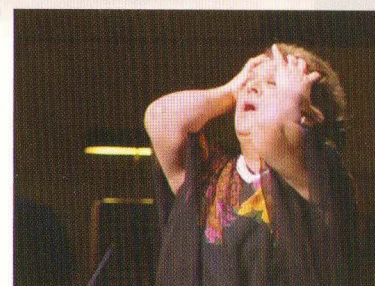
第1部

モーツァルト 「フィガロの結婚」から
“序曲” “自分で自分がわからない” “さあ早く来て、喜びの時よ”

ビッチニ 「良い娘」から
“頭にくる高慢ちき”

ビゼー 「カルメン」から
“前奏曲” “ハバネラ”

サンサーンス 「サムソンとデリラ」から
“あなたの声に心は開く”



第2部

マスカーニ 「カヴァレリア・ルスティカーナ」から
“間奏曲” “ママも知るとおり”

チレア 「アドリアーナ・ルクブルール」から
“間奏曲” “苦い喜び、甘い苦しみ”

ヴェルディ 「アイーダ」から 4幕1場 アムネリスのモノローグ
“ああ、生きた心地がしない”

「記念ガラコンサート」

日時：2007年11月30日(金) 19:00開演(18:30開場) 会場：東京オペラシティコンサートホール

出演：フィオレンツァ・コッソット
指揮：ニコレッタ・コンティ
演奏：東京フィルハーモニー交響楽団

主催：ヴォイス・ファクトリー株式会社／朝日新聞社
後援：イタリア大使館
協力：アリタリア航空



この世の中で一番大切なもの、それは「愛」です。
音楽はそのために存在するのです。
私にとって歌う目的はそこにしかありません。

Norma Corsetto